

放射能汚染への対応について

2011年9月1日 関西よつ葉連絡会

原発事故による放射能汚染はもはや避けることができません。狭い日本の中で、程度の差はあれ、汚染の影響を全く受けない地域はないと考えます。住むこともできない地域も発生するという最悪の事態となってしまいました。

被曝量に「これ以下なら影響がない」という値はありません

過去に広島・長崎の原爆、夥しい核実験とそれによる被曝、原発事故、原子力潜水艦事故など、1世紀にも満たない間に幾多の原子力災害が発生しました。その度に、大量の放射性物質が大気中にばら撒かれ、海に、核廃棄物が大量投棄されました。今回の東電が起こした事故で、今まで以上に放射能汚染に晒される環境の中で私たちは生きていかねばなりません。

放射能による健康被害は被曝量が「ある一定線量以下であれば何の問題もない」という主張には同意できません。何らかの影響は確実にある、というのが私たちの立場です。しかし、その影響は長い時間が経って現れる、成長途上にある子どもとそうではない大人では異なる。一様ではなく、また確定的なものではないことをいいことにして、原発を懲りずに推進しようという人々は問題があるとは認めません。

核の技術によってもたらされる負の影響は、半永久的に次の世代以降にも及ぶ、非常に危険で無責任な技術です。

汚染に関する情報をお知らせしていきます

私たちも、現在、自主検査の準備を進めています。また、必要と思われるものについては外部機関へ検査委託しています。産地からも情報が寄せられています。

得られた情報は、「今週のお知らせ」などの紙面上で、今後、継続してお知らせしてい

きます。安全性を強調するためではなく、放射能汚染から逃れられない以上、一人一人が汚染と向き合うひとつの材料として活用してもらうためです。

ただし、自主検査は限界もあります。ある時点で調べて問題なくとも、時間の経過とともに問題が確認されることもあります。また、検出限界の能力の低い機器で調べれば、ほとんどが「不検出」となりますが、不検出は汚染ゼロということではありません。その機器では検出できない、という意味しかありません。

ある程度の汚染は覚悟しなければならないことだと思っています。しかし、内部被曝の問題は、遺伝子が傷つき、細胞分裂（成長）を繰り返す度に健康を害する因子が増大していく、それゆえ成長過程にある子どもへの影響の方が大きい、とされています。完全に避けることは困難でしょうが、子どもたちへの配慮は大人以上に必要であろうと思います。

ごまかしのない情報開示を要求していこう

きちんと放射能汚染と向き合うためには、政府、自治体が、長期にわたり、系統的に調べ、その上で、人々の知恵を集めて、汚染に立ち向かうことが求められています。その動きは極めて鈍いのです。早急に、政府・各自治体が汚染に真摯に立ち向かうよう求めて、声を上げていかなければなりません。規制の値も当然もっと厳しいものにしていく必要があります。

同時に、これ以上の汚染の増大を防ぐには源を断たなければダメです。原発廃止に向けてもっと声を上げていくのは当然のことです。

汚染に向き合い、共に行動を

どうすれば悪影響を最小限にすることが出来るのか？ 人の知恵が問われています。

人々が放射能汚染と正面から向き合うようになったのは旧ソ連のチェルノブイリ原発事故の後です。まだ、20数年の経験しかありません。深刻な汚染から逃れられないヨーロッパの一部地域において、そこに住む人々が、良心的な科学者とともに、試みを重ねながら、積み上げている貴重な経験です。

怒り、嘆いているだけでは何も進まない、福島周辺で、ヨーロッパでの経験に学びながら、自主的な取り組みも始まりつつあります。私たちも、そんな活動を応援し、課題を共有し、共に行動していきたい、と考えています。